第五回ハイクアート賞発表！

俳句美術館 第五回 ハイクアート賞に多数のご応募をいただき、有難うございました。

『俳句部門』では、八木健の制作したアート九点に俳句をつけてご応募いただきました。『ハイクアート部門』では、アートと俳句の両方をご自身で作っていただいた作品でご応募いただきました。

応募総数は、俳句部門が一二六点、ハイクアート部門が八七点でした。俳句部門、ハイクアート部門、いずれも応募作品を各審査員にご審査いただき、高得点作品から大賞、選者特選、秀逸、入選の各賞を決定致しました。

俳句部門

大賞

サキソフォン沖に満月上げにけり　大阪府　久松久子

【講評】一面の紫紺に満月。サキソフォンは、サミー・デービスＪｒ渾身の演奏でしょうか。アートも俳句もぴったり（冨士）。

サキソフォンが月を上げたという、言語感覚を称えたい（松本）。

特選

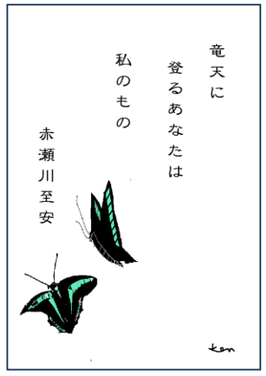
池田澄子賞

海中（わだなか）に幾万の魂（たま）終戦日　大阪府　久松久子

【講評】海の中の平和な景の絵を見て、その底に沈みつづけて在る死者。その魂に思いを至したことに深く同感。

小西昭夫賞

竜天に登るあなたは私のもの　埼玉県　赤瀬川至安



【講評】アオスジアゲハの画からの、「竜天に登る」の発想といい、句またがりにした「あなたは私のもの」という断定にもビックリ。

冨士眞奈美賞

とりたてのうちの林檎よ召しあがれ　東京都　早川高典

【講評】母親が、自分の娘を自信を持って差し出す場面を思い出しました。漱石の「こころ」の夫人が先生のプロポーズに「よござんす。差し上げましょう」と応えたところです。

松本勇二賞

二万種の絶滅危惧種浮いてこい　石川県　山口　徹

【講評】「浮いてこい」という玩具がペーソスを誘い、二万種の絶滅危惧種達への呼びかけのようでもある。

八木健賞

ふた文字を言えず林檎を狩るふたり　東京都　樋口盛一

【講評】徒然草に謎々の歌がある。「ふたつ文字（こ）牛の角文字（い）直ぐな文字（し）歪み文字（く）」。この現代版と見た。好きと言えず、禁断の林檎を食べるのは先の話。

秀逸

今晩はこの万年筆とすごすと決めた　茨城県　舟橋優香

【講評】口語俳句で単純明快な強さがある。読者が共感するしないは読者の自由。俳句は自由な文芸だということを教えてくれる（八木）。

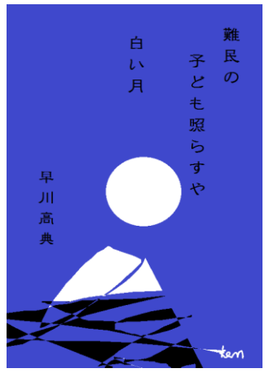
枇杷熟るる淡路島への連絡船　大阪府　久松久子

【講評】近年、淡路島の枇杷はブランドらしいが、枇杷と淡路島の取り合せが新鮮。今や陸路で行くばかりの淡路島と連絡船の取り合せも懐かしくかえって新鮮。面白い（小西）。

蜘蛛の囲に星のかけらがかかりたる　埼玉県　稲葉純子

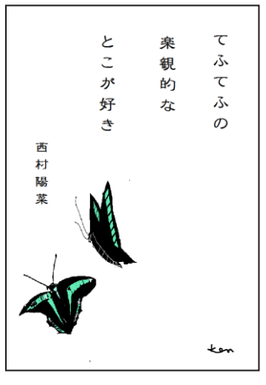
【講評】蜘蛛の囲にかかったのは獲物ではなく「星のかけら」。雨上がりの雨粒の比喩なのか、本当の夜空の星なのか、どちらに読んでもオシャレな句だ（小西）。

難民の子ども照らすや白い月　東京都　早川高典



【講評】地球は自分のために回ってはいないという意識。静かな祈りの人としての自然な思いに同感できた（池田）。

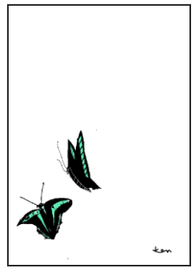
てふてふの楽観的なとこが好き　山口県　西村陽菜



【講評】「てふてふ」という文語表記を使いながら、中七、下五は口語の現代語表記。このミスマッチが面白い。俳句ではタブーに近い表現を逆に魅力的なものにしている（小西）。

入選

アート① 蝶



さなぎだった頃の夢見し暑い朝　西田真己
標本に余る二匹の蝶のゐて　山口　徹
ひらひらとあはせ鏡に黒揚羽　早川高典
だだこねる幼子一人秋の蝶　川島智子
てふてふや文字そのままの舞ひ姿

アート② 枇杷

裏木戸の付合ひ長く枇杷明り　久松久子
枇杷とりて食べし教室廃校に　荒井良明

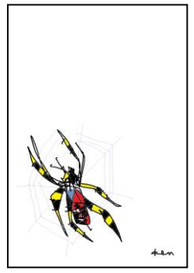
アート③ 海

海の日のリフトで登る高尾山　村上ヤチ代

アート④ ワイン

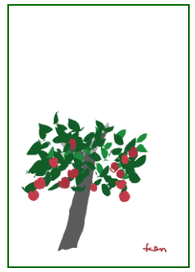
ああこれは銀河の味のワインだね　西村陽菜
気紛れな秋ワインには嘘もある　初霜若葉
寸志やら謝礼やらあり桃の酒　赤瀬川至安

アート⑤ 蜘蛛



蜘蛛の網囲いし空の秋うらら　あおきがく
蜘蛛の糸からまる先に蜘蛛がいる　入江駿佑
高階の窓に下がりし蜘蛛の糸　久松久子
蜘蛛の巣は進路に悩む我が心　知念福斗

アート⑥ 林檎



日本の平和は赤い林檎から　久松久子
可愛くも真面目装う林檎かな　西村泰子

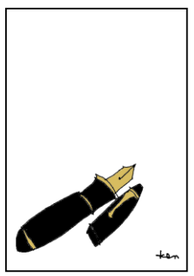
アート⑦ 秋の山

這ってでも辿り着きたやもみぢ山　川島智子
赤と黄を立つる緑や紅葉山　堀ノ内和夫
うっふんと山うっふんと粧へり　早川高典
照紅葉終り良ければ全てよし　久松久子

アート⑧ 月

冬灯男の陰に女居て　山口　徹

アート⑨ 万年筆



日記果つ万年筆を裏切らず　初霜若葉
万年筆夜の長きをもてあそぶ　稲葉純子
思ひなほ綴れぬままに日脚伸ぶ　大西誉子

ハイクアート部門

大賞

初恋の終わりのための春である

山口県　西村陽菜（デジタル）

【講評】
桜と思しき絵であるが、多分に抽象的である。落花の頃の風景と見たが大いに吸引力があった。白抜きの手書きによる俳句も印象深い。春という季節を「初恋の終わりのため」と断定したことで印象深い句となった（松本）。

卒業の春を思わせる。桜の季節が来たらお別れ。「ための」が、とても微妙な気分を現わす。覚悟だろう。もやっーとした色彩が、とても似合っていると思った（池田）。

特選

池田澄子賞

風薫る電子書籍を読む婦人

東京都　三谷　悠（写真）

【講評】
まず、俳句が素敵。軽いオッ！　という気分が程よく素敵。「婦人」は、若くはない。そのことで一句が成り立ちながら、写真に夫人の姿が小さく、年齢に関っていない。「風薫る」景が素敵。

冨士眞奈美賞

風車には風車のペース夏の海

東京都　三谷　悠（写真）

【講評】
青々と広がる空と海。白い雲。七基の風車がすくっと立ち、長く伸びた突堤に小さな燈台が。自然と文化の美しい調和。実に爽快です。

小西昭夫賞

それぞれに思うことあり春の暮

東京都　難波美枝子（写真）

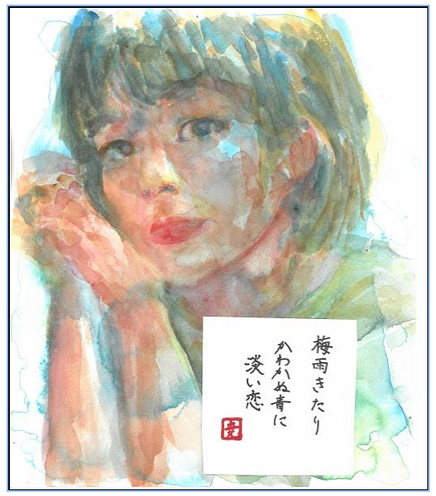
【講評】

上段の写真と下段の俳句を大胆に二分割し、下段の俳句スペースを少し大きく取り、白地にして俳句をクローズアップさせた。写真と俳句が単なる説明に終わらず、写真が俳句を、俳句が写真を引き立てている。見事な作品である。

松本勇二賞

梅雨きたりかわかぬ青に淡い恋

徳島県　保岡　尭（水彩）



【講評】

「かわかぬ青」の理解で解釈が分かれよう。添えた絵の中の青色と見るのが常套か。絵を描き終えた直後の対象へのちょっとした心の揺れが描けている。「梅雨きたり」は敬遠される季節を逆に歓迎しているような書き方で興味を持った。

八木健賞

雨蛙玄関ノブでお出迎え

福島県　石塚柚彩（写真）

【講評】

硬く閉ざした玄関のドアは、白と黒の無機質な物体である。生命や体温を感じさせない、無味乾燥な存在である。配するは、何万年を生き抜いた蛙の末裔で、美しい色を持ち、息遣いまで聞こえる柔らかな生き物である。

秀逸

夜の来て星に還らむいぬふぐり

東京都　青木かずこ（切り紙、パソコン、水彩）

【講評】大きな一本の木と大地を切り絵でシルエットにして、夜空に月と星をちりばめた。アートに配された俳句から、その星が実は昼間の「いぬふぐり」なのだという素敵な物語が生れている。俳句の文字の黄色の表記も星を連想させる（小西）。

「いぬふぐり」は地上の星である。作者は「いぬふぐり」を空に返したいのだろう。画像が特に優れている。大木の大きく広げた枝と一枚ずつ描かれた葉の「たんねんさ」が素晴らしい（八木）。

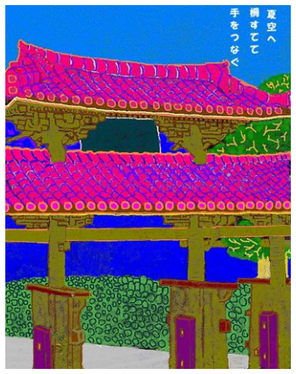
体ひとつはまれば塼（ねぐら）温め酒

兵庫県　内海　淳（サンドブラスト彫刻）

【講評】ワインの瓶のラベルに俳句を書いたアイデアが楽しい。実はこの手法は、私の句集『ペリカンと駱駝』の装幀に神山恭昭さんがビール瓶で行った手法でもある（小西）。

夏空へ柵（しがらみ）すてて手をつなぐ

奈良県　堀ノ内和夫（ペイント）



【講評】色彩の美しさに目を奪われます。光り輝く瓦を「柵」とは面白い発想。この景には、この色彩が必要なのです（冨士）。沖縄の首里城であり、沖縄へのメッセージの句であろう。「夏空へ」の「へ」の効果で方向性や空間性を獲得した。誰もがこの絵の青空を見上げる（松本）。

祖父語り祖母の合ひの手初鰹

東京都　三谷　悠（写真）

【講評】祖父の話に祖母が合いの手を打つ。話題は「初鰹」のこと。かつての懐かしい風景である。写真は家族の歴史を物語りますね（八木）。

ゲリラ雷雨地球を救う孫戦士

福島県　石塚柚彩（写真）

【講評】「つくりもの」を巧みに利用した柔軟な発想に拍手をしたい。孫戦士が何なのか分からないが、それでも作品からは朗らかな親と子の遊び心が伝わってくる（八木）。

入選

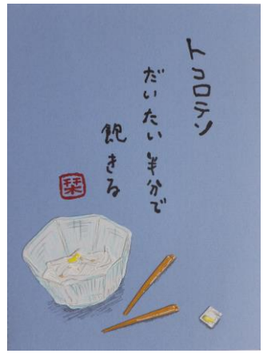
蚕豆や苦くて甘い三兄弟
愛媛県　池内祐子（切り絵）

ひとり旅はるか遠くに夜光虫
愛媛県　久我正明（写真）

いなびかりなんで茶髪にしてはるの
愛媛県　久我正明（写真）

赤きそり押してもらって子供車掌
東京都　三谷　悠（写真）

トコロテンだいたい半分で飽きる
愛媛県　眞鍋栞奈（切り絵）



春こいし春こいこいと春こがれ
愛媛県　相澤宏水（切り絵）

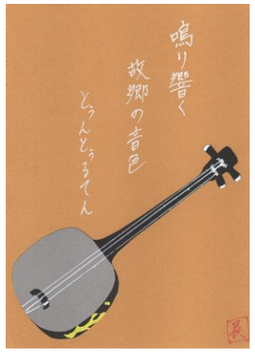
シャガールの浮かぶ花嫁春の宵
東京都　青木かずこ（切り紙、パソコン、水彩）

エサたべる金魚をねらうまあるい目
愛媛県　西岡姫加（切り絵）

青草をふかりと踏みて足冷たし
愛媛県　中山真実（切り絵）

人妻に溺れる旅の夏季手当
愛媛県　久我正明（写真）

鳴り響く故郷の音色とうんとうるてん
愛媛県　長谷川ひなの（切り絵）



審査員紹介

池田澄子

豈同人・船団同人。句集『たましいの話』『拝復』『思ってます』、著書『休むに似たり』『あさがや草紙』他。

小西昭夫

子規新報編集長、愛媛新聞俳壇選者。著書『花綵列島』『ペリカンと駱駝』『小西昭夫句集』他。

冨士眞奈美

句歴四十年。俳壇賞選考委員。女優。句集『瀧の裏』、エッセイ『東京俳句散歩』『身ひとつの今が倖せ』『でのひらに落花』他。

松本勇二

愛媛県現代俳句協会会長、「海程」同人。

八木　健

俳句美術館館長、滑稽俳句協会会長、「八木健のCATV俳句」番組主宰。句集『ゆず』『逃水』『滑稽俳句集』、著書『俳句人生でいちばんいい句が詠める本』他。

第6回ハイクアート賞募集要項

1. 俳句部門…八木健のアートに俳句をつけてください。
2. ハイクアート部門…ご自身のアートに俳句をつけてお送り下さい。

募集期間：平成30年4月1日～平成30年7月31日
審 査 員：池田澄子　小西昭夫　冨士眞奈美
　　松本勇二　八木健
結果発表：平成30年10月下旬予定。
主　　催：俳句美術館　（問合せ 090-8287-1390）

＊作品はオリジナルのもので未発表に限る。
＊募集内容の詳細は、俳句美術館ホームページに、平成30年2月末頃掲載予定。「俳句美術館」で検索可。
http://wwwhakubjutsukancom
＊応募作品の著作権は主催者に帰属。